

たが、集落地理学の講義を受け持たれていた程であるので、フィールドや巡検で説明される対象は種々で、その観方は広がった。直接お聞きしたことはないが、先生は地理が好きで、地理の面白さを心得ていらっしやっただと思う。何にでも興味があり意欲旺盛な学生には自ずとそれは伝わるもので、私もフィールドでのいろいろな観方が身につくに従い、さらに地理が好きになりその観方や考え方の大切さを実感できるようになった。

私が東大に移ってからは、自分の仕事や日常に追われる毎日であったが、東大の巡検の授業に式先生をお願いしたことがあった。先生と私が運転する車2台で佐渡島を巡った。フェーン現象の猛暑と青い空、透明な海が印象に残った楽しい巡検

であり、フィールドを御一緒した最後であった。今考えると当時の先生は何と活動的で、精力的にしかも緻密に、そして愉快地仕事をされていたことかと思心するばかりである。伸び盛りの、いろいろな知識やものの見方・考え方が身につけていく時期に、そのような先生に出会えた私は恵まれていたとつくづく思うのである。

カタカナがさらりと入ったしゃれた文や気のきいた随筆をお書きになる先生の弟子にしては拙文であるが、御退官を機に、先生の40代の御様子、先生のお人柄の一部を書かせて頂いた。感謝をこめて。

(14回生)

先生の言葉

栗原尚子

お茶の水女子大学の教壇に立つようになってから、早いものでこの3月で10年になる。周囲には、5年もつかもたないかといわれて、さもありなんと思いつつ10年が過ぎてしまった。精神的金属疲労のはげしいこの頃であるが、式先生が、地理学教室に尽くされてきた多大なる力と月日に比べれば、序の口であらう。

式先生との出会いは、教師と学生との関係から始まった。10数年の歳月を経て同じ所で仕事をすることになって、この本質は変わらなかったと思う。先生が、身をもって示された数々はいろいろな意味で影響をこれからも及ぼすであらう。

先生が、発せられたいくつかの言が、いまま印象的に脳裏によみがえる。その言が、断片なる時を経て繰り返しよみがえるとき、教師たるものの一つの姿を示されているように思われる。

卒業論文の指導学生のフィールドには必ず一緒に出て下さり、その時貴重な経験をした人は多いと思う。私のフィールドは江戸川のデルタ地帯であった。当時大学院生であった滝沢由美子さんと一緒にフィールドをまわって下さった。この時の

印象に残る言葉は、行徳の新居浜の御簾場を見学したとき、「これぞ帝王の趣味です」と感嘆されたことであった（フィールドにていろいろ御指摘下さったことも決して忘れていないのですが、この言が妙にこの地域の歴史の一端を象徴しているようで残っているのです。念のため。）。2年前、20余年を経て、再び同じ所をフィールドにした学生の卒業論文作成のゼミを担当することになって、感慨を新たにしたところです。

4年生の正月、新年の御挨拶に同級生と3人で伺ったとき、「これはレディーのすることですね」と言われた。その時以来この方、悲しいことかなレディーと言われたことがない。4月から勤めることになっていた一橋大学まで車で連れて行って下さったのも、車窓から眺めた残雪の景観とともに忘れられない一コマである。

卒業後の思い出での決定版はメキシコをめぐるである。1972年にメキシコに留学していた折り、先生もちょうど在外研究で、アメリカ合衆国のチューソンにいられることを知り、クリスマスカードを出したところ、汽車の長旅を厭わずメキ

シコまで出向いて下さった。メキシコ・シティで感激の対面をするはずであった。しかし、なんたること、クリスマス時期で、大学の講義はなく、ちょうど下宿を引っ越したととぶつかり、手紙を受け取ったときは、時すでに遅しであった。この場を借りて、改めてお詫びします。

4年前、切腹手術に直面したとき、「君は男の厄年で考え方がいいかもしれないね」と言われ大いに納得してしまったこと、父の最後を送るのに右往左往したこの2年、「親はどういう形であれいつまでもいてくれた方がいいと思うようになりますよ」等等忘れられない言葉である。戦闘真っ最中の時には、深く私の心に到達しなかったが、今にして思えばである。中でも、迷惑をかけ

どうしであったのにも関わらず、通夜の席で、「よく尽くしたよ」と言って下さったことにどれだけ救われたことか。言葉だけが全てでないことは確かである。言葉は凶器にもなることもある。しかし、人を思う心の優しさがあるとき、言葉は人の苦しみを和らげる。式先生の言葉が心に残るのは、そんな言葉であるからだろう。

物事に「甘い」ことが横行するこの時代に、「厳しさ」をどのように振り向けて行くのかが、式先生から課された私のこれからの課題の一つであろうと思う。純度100%の砂糖に近い私にとっては、重たい課題ではある。

(16回生)

先生のこと

新井桂子

地理学教室に助手として勤務して、早5年の歳月が過ぎようとしている。4月から翌年の3月までを1つの周期として、事務的な事柄は毎年繰り返されるが、人間に関することはいつも突然に起こる。昭和58年に学部を卒業し就職した私が、大学院へ進学したいと申し出たことも、突然の出来事の“端くれ”くらいには加えられることだろうか。どうか無事合格させていただき、何を研究するかは、「平地林について」くらいしか言えなかったが、指導教官は式先生にお願いしようとしていた。

先生のご専門は、地形学・地図学から地誌学まで広い分野をカバーしておられるが、その基本は、フィールドワークに置かれているように思われる。先生との最初のフィールドワークは高尾山であった。

大学院に入学して間もない6月の一、二日、先生と荻窪駅でお会いして、中央線を西に向かい、高尾駅に着いた。まずむかったところは、浅川の林業試験場であった。平地林を研究したいと言いながら、そういうものとは全く無縁に暮らしていたの

で、まず基本的なところからと、御一緒に下さった。

「お茶の水女子大学教授」の名刺が効いたのか、試験場の場長さん自ら応対して下さい、場内も案内していただいた。その時そこに植えられていたのが「サンプスギ」であった。樹形は整った三角形で、樹齡50~60年程の一群のサンプスギは千葉県下総台地南部の山武町が主産地だという。東京から50km余りのところにかなりまとまった平地林が残っているという貴重な情報が得られたのだった。私はこれを修士論文のテーマとすることになる。

その日はそれから高尾山に登ったまではよかったが、下山は徒歩で歩き始めると、雨は降り出すし、道はなくなってくるし、山歩きの経験のない私はどうなることかと少々不安に思ったものだった。勿論、無事に山を降りることはできたし、後で、この時の話になっても、先生は「あれくらいはたいしたことはありません。」とおっしゃっている。

私の場合は修論であったが、先生は、卒論を指